

教育革新シンポジウム「新しい教養教育の実施に向けて」

【趣 旨】

平成24年度より、本学の教養教育は大きく変わる。本シンポジウムは、新たな教養教育の考え方と実施体制について十分理解を深めるために企画された。第1部では、日本学術会議における「大学教育の分野別質保証の在り方検討委員会」（2008年～2010年）の下、教養教育・共通教育検討分科会の副委員長をなさった小林傳司・大阪大学教授をお招きし、当分科会での議論経過を踏まえながら今後の教養教育のあるべき姿を論じていただく。第2部では、本学における新たな教養教育のワーキンググループ・メンバーから、来年度以降の教養教育の理念と実施体制について解説していただく。教養教育を担当される教員の方々にはぜひご出席いただき、新たな教養教育への理解を深めていただくとともに、より効果的な実施体制に向けての議論にご参加下さるよう期待する。

【対 象】 教養教育担当者

【日 時】 平成23年12月17日（土）13:30-17:15

【場 所】 総合教育研究棟3階講義室

【内 容】

13:30 ～ 13:45 開会挨拶 片峰 茂 学長
＜第1部 基調講演＞
13:45 ～ 14:45 基調講演 小林 傳司 教授（大阪大学）
14:45 ～ 15:00 質疑応答
15:00 ～ 15:15 休 憩
＜第2部 新たな教養教育の実施に向けて＞
15:15 ～ 15:35 全体説明 橋本 健夫 副学長
15:35 ～ 15:50 質疑応答
15:50 ～ 16:10 全学モジュール例 心身の健康と生命 安武 亨 教授（医歯薬学総合研究科）
16:10 ～ 16:30 全学モジュール例 安全で安心できる社会 松田 浩 教授（工学部）
16:30 ～ 17:10 総合討論
17:10 ～ 17:15 閉会挨拶 橋本 健夫 副学長

【到達目標】

- ① 大学を取り巻く社会情勢を踏まえた新たな教養教育の考え方について理解を深める。
- ② 本学における平成24年度からの教養教育の理念と実施体制について理解を深める。

【主 催】 教務委員会

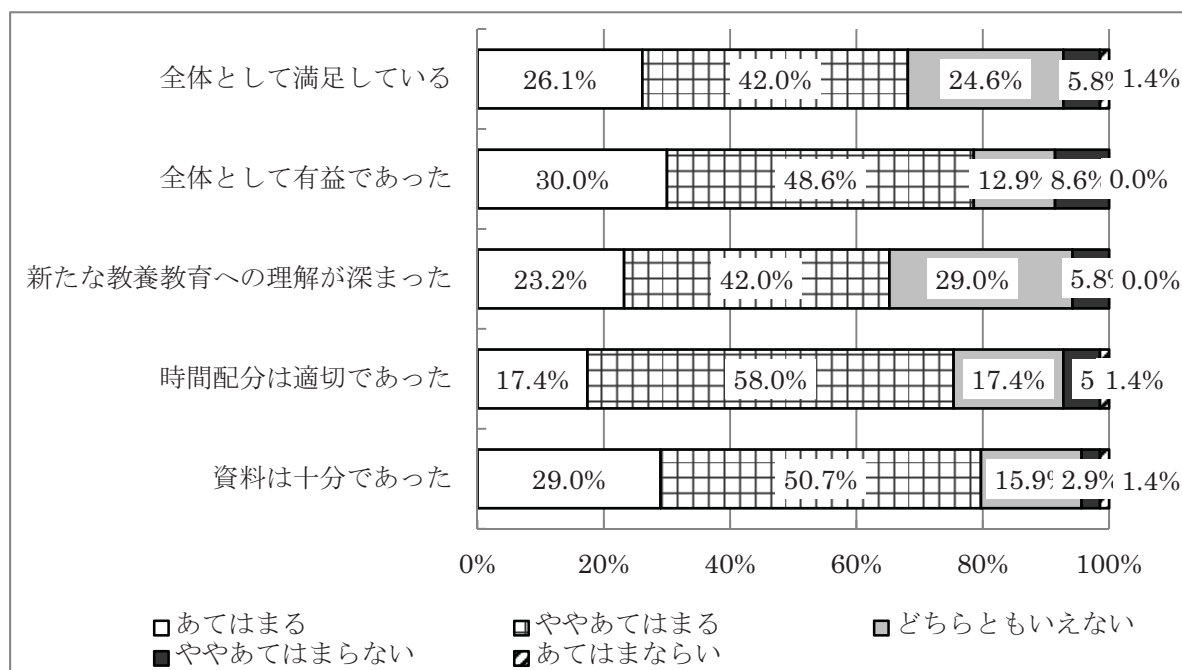
【企画・実施】 評価・FD教育改善専門部会

【参加者】

98 名（受講証発行対象者：97 名）

所 属	職名	人数
広報戦略本部	教授	1
	准教授	1
産学官連携戦略本部	助教	1
	教授	7
教育学部	准教授	3
	教授	2
経済学部	准教授	1
	教授	7
医歯薬学総合研究科（医）	助教	3
	講師	2
病院	教授	4
	准教授	2
医歯薬学総合研究科（保）	教授	4
	准教授	1
医歯薬学総合研究科（歯）	教授	5
	准教授	1
医歯薬学総合研究科（薬）	教授	7
	准教授	7
工学研究科	教授	10
	准教授	5
水産・環境科学総合研究科（環）	教授	6
	准教授	6
水産・環境科学総合研究科（水）	助教	1
	特任教授	1
国際健康開発研究科	教授	1
	教授	1
情報メディア基盤センター	教授	1
	准教授	1
大学教育機能開発センター	助教	1
	教授	2
アドミッションセンター	准教授	2
	講師	1
アドミッションセンター	助教	1

【参加者からの評価】



○新たな教養教育について、疑問点や感想、ご意見などがありましたら、率直にご記入ください。

- ・基調講演は、教養というものを根源的なところから学べた。（医歯薬学総合研究科・教授）
- ・「改革しつばなし」とならないように、旧全学教育と新しい教養教育を比較・評価できるシステムが必要だと思う。（水産・環境科学総合研究科・准教授）
- ・水産学部では、先に「水産伝道師養成プログラム」と称し、専門教育の中に専門知識を市民社会に生かすための能力を高めるカリキュラムを文部科学省に提出し、リジェクトされた経緯がある。全く同じような理念を、教養教育で実現したいという国の方針を伺い驚くとともに、なぜ専門教育の中にこれを置かせてもらえなかったのかという疑念が強まった。（水産・環境科学総合研究科・准教授）
- ・良い教育システムとコンテンツを作っていくためには、それなりの時間と労力をかけて行う必要がある。そのためには、モジュール担当者（責任者）には、その時間が割ける人材を割り当てる必要がある。教員の中でも、多くの研究費（プロジェクト等）を抱えている人間は、そちらに多くの時間を割かなければいけないため、そのような研究活動の負担の少ない教員に、このようなモジュール教育を主導していただけるような仕組みを、トップダウンで、作っていただきたいと思う。さもないと、システムも人も破綻する。（水産・環境科学総合研究科・助教）
- ・大阪大学の小林先生のご講演は非常に興味深く拝聴できた。全学モジュール例のお話も興味深かった。（水産・環境科学総合研究科・准教授）
- ・新たな教養教育を教員全員に認識させるのは非常に難しい。今はトップダウン型の流れになっているので、それでよしとしないでほしい。ある程度時間割ができた段階で、シミュレーションをしてほしい（学生の選択にどれくらい偏りがあるか）。教養セミナーについての総括をしておいた方がよい（教育効果の判定の指標のようなもの。成績ではない）。（医歯薬学総合研究科・教授）
- ・モジュール内において、情報が上から下りてこない。学務系を間において、いきなり問い合わせがくるので具体的な議論ができない。（医歯薬学総合研究科・准教授）
- ・小林先生の話はとても興味深かった。教養教育だけでなく、専門教育にこそPBLの授業を導入することが必要だと思う。また日本の教育の問題は日本にいたるだけでは実感できないと思う。PBL方式の授業は欧米では小学校から行っていることでもある。学生を留学させることに積極的でない学部もあるが、グローバル化する世界で本当に国際的に活躍する市民を育てるためには、海外に留学させ、体験を通して異質な他者とのコミュニケーション能力を高め、思考を深め、社会的問題に立ち向かわせるために有効であると思う。それと同時に日本の教育も変化させ、他の国から手本とされるように私たちも努力して、大学を変えていかなければならないと思った。異質な集団での議論が必要と小林先生はおっしゃっていたが学部混合の授業は必要なのではないでしょうか。（大学教育機能開発センター・准教授）
- ・Teaching から Learning への授業形態の変化については、教員としては非常に大切であると思う。教員へのレクチャーと同時にこのような形式で授業を行うことについて学生への事前説明があるとより講義がスムーズに進行すると思う。

様々な教員の先生方が熱心に学生のことを考えているのが非常に良く分かった。このような会合へ学生が見学者として入れるとよりいいと感じた。（病院・講師）

- ・小林先生の講演に合った「教養教育」の考えを長崎大学が取り入れてほしい。例えば、「市民性」などが掛けられているように思う。学部モジュールがなぜ教養教育なのか疑問である。（教育学部・教授）
- ・大変参考になった。（アドミッションセンター・助教）
- ・基調講演を通して、教養教育が変わっていくべき方向性について、かなり理解が進んだように思う。本学における教養教育の理想をどのように自分の担当するモジュールの中で具現化していくのか検討したい。モジュール科目の到達目標の「目標キーワード」の意図するところを、もう少し詳しくご教示いただきたい。（情報メディア基盤センター・准教授）
- ・外来語（カタカナ）が多すぎて、また1つのワードの定義が様々であることが多く、理解するのに疲れるところがあった。例：モジュールとは、長大では「1つのテーマのもとに、社会から要求されている諸能力を育成するために集めた科目群」であるが、他大学ではいなか。また、語源は、module でしょうか。語源が知りたい。システムを構成する部分集合体に由来するのか。（水産・環境科学総合研究科・准教授）
- ・新たな教養教育のカリキュラムを組むにあたり、アクティブラーニングを取り入れたいが、そのツールとして、e-learning system を使用したいと考えている。しかし、長崎大学における e-learning system ソフト及びハードやその使い方について、特別な講義を教員向けに行ってほしい。（医歯薬学総合研究科・教授）
- ・小林教授の講演が非常に内容のあるものだと感じた。より早めの段階でされればさらに教養教育改革に資するものになったのではないかと。また、安武、松田両教授の取組例にもぜひ取り入れたいものがあり、非常に参考になった。（経済学部・准教授）
- ・教員一人ひとりの熱意がないと、どのような改革も無駄な努力になる。熱意は、どこから生まれるのかを考えさせられた。（水産・環境科学総合研究科・教授）
- ・具体的な運営のシステム（誰が「どれだけ」「誰に対して」「いつ」など）の情報共有がまだされていない。（医歯薬学総合研究科・准教授）
- ・担当教員全ての意識改革が必要。（教授）
- ・夏のFD（蛙の授業）にも参加して思うのは、アクティブラーニングにはエネルギーがとてもかかりそうという感じである。すでに学部教育では一部取り入れているがさらに教養教育にも取り入れるのはきついというのが実感である。今日の話聞いて改めてそう思った。他学部用モジュールの受講生についての橋本先生のお答えに疑問が残った。歯学部モジュールは医と薬は受けられると聞いていたので。（医歯薬学総合研究科・教授）
- ・学部環境の整備をお願いしたい。社会人講師、TA を取りやすくしてほしい。（教育学部・教授）
- ・社会の視点を常にフィードバックできる仕組化が必要と感じる。（広報戦略本部・教授）
- ・PBL を実施する場所がないのでは？ハートも不足していないか？（産学官連携戦略本部・准教授）
- ・ベースは、JABEE と同じと感じた。「新たな教養教育」といっても、特に新鮮さは感じられなかった。既に JABEE でやっている内容とおなじであれば、それを参考にすべき点は多々あると思う。異なる点は明確に示していただきたい。JABEE との整合についてももう少し具体的に示していただきたい。（工学研究科・教授）
- ・図書館改装に伴うラーニング・コモンズを PBL 授業で使うことも検討ください。（水産・環境科学総合研究科・教授）
- ・小林先生のお話は非常に興味深く、共感することも多かった。しかし、それと本学の改革（モジュール）は似ているようで全く違うものであるように思えた。（水産・環境科学総合研究科・准教授）
- ・理念から具体的な方法論まで勉強になった。（医歯薬学総合研究科・教授）
- ・現在の教養教育のどの箇所に問題があり、新しい教養教育でどのように解決するのが十分に理解できない。現在の教養教育の問題点はシステムの問題ではないのではないかと考えて思う。モジュール化反対ではなく、どちらでも同じという受けとめ。問題点は、担当教員の意欲、評価法や学生の意欲のところではないのかと思う。私は、学長が言われたモジュール化の目的について、現在でも実施している（アクティブラーニング、非文字情報も、問題点抽出、記述力、思考力、正解のない問題、批判力等導力）。専門教育にとつての教養教育の意義について、教員、学生に納得させるべきであろうと思う。モジュールでは、選択する科目をあるテーマでパッケージにしているようですが、そのテーマのみで教養教育の成果としてよいのですか。また、受講前での決定であり、受講中に必要な別モジュールの科目を学習したいと思った時の対応が出来ないように思う。境界を固定するのではなく、選択1科目位は別モジュールから受講可能ないように出来ないのですか。（工学研究科・准教授）
- ・教養教育の新しい試みについて、最近の動向と長崎大学の取組の姿勢等がある程度理解できた。横文字（カタカナ）表示の理解が難しい。新しい教養（教育）の意味、位置づけを知る機会となった。（水産・環境科学総合研究科・教授）

- ・モジュールの設定が重要かと思うが、それがあまり議論されていない。もっと時間をかけてするべきではないか。今後もモジュールの変更等柔軟な対応を望む。アクティブラーニングのノウハウを恒常的に供給していただきたい。（水産・環境科学総合研究科・教授）
- ・一般の座学での講義で、どのような講義方法が良いのか事例があれば教えていただきたい。（工学研究科・教授）
- ・小林先生のお話はわかりやすく、教養教育とは何かについて理解できた。モジュールで「PBL ができるのか」ますます疑問である。人数の問題など。（工学研究科・准教授）
- ・個人的には、自分たちの受けた教養が良かったと思う。「社会学」とか「文化人類学」とかの科目を習ったという意識が持てないのは寂しいと思う。今の科目名からは、一般にはどんな科目を習ったのか後ではっきりしないのは寂しいことだと思う。（水産・環境科学総合研究科・教授）
- ・アクティブラーニングを導入するためには、TA の活用が不可欠。インセンティブを入れるより、TA 経費の方が大切である。（工学研究科・准教授）
- ・70-100 人のクラスでの PBL 教育は難しいのではないのでしょうか。（工学研究科・准教授）
- ・結局なぜモジュールなのか不明であった。
- ・アクティブラーニングは教養教育の実施体制の中で、やれるのか。（水産・環境科学総合研究科・教授）
- ・アクティブラーニングの重要性は理解できたが、全学モジュールⅠの受講生は150名程度と聞いており、そのような多数の学生を一人の教員で担当してアクティブラーニングを行う方法は、私には考えられないので、何か良い方法があればぜひご教示いただきたい。
- ・小林先生のご講演は期待以上であった。リベラルアーツの重要性が改めて認識されたと思う。産業界のいいなりになっていいわけではないというのも共感できた。全体として、小林先生のお考えと長大の方向性は大きく異なると感じた。長大の学部モジュールは、どう考えても、小林先生のおっしゃる「教養」とは言えない。佐久間先生がおっしゃられたように、現在の全学教育のリベラルアーツ的側石が大幅に制限されてしまう恐れがあると感じた。（教育学部・教授）
- ・広いモジュールもあれば使い物もある（全学）学生の選択を可能な限り受け入れてもらいたい。（工学研究科・教授）
- ・全学モジュール例は全く参考にならなかった。（工学研究科・准教授）
- ・従来の全学教育システムの問題点や課題が不明。新しい教養教育のシステムとして「モジュール」方式がなぜ優れているのか不明。新しい教養教育の1つの重点として「英語教育の充実」があるが、全学部の入試に英語を課し、入学者の英語力のレベルを一定以上に保つべき、さもなければ、「理念」と「現実」の差が大きすぎて目標の達成は不可能だと考える。（水産・環境科学総合研究科・准教授）
- ・100-150 人/1 クラスで、行えるアクティブラーニングや PBL の手法を具体的に数例教えていただきたい。（水産・環境科学総合研究科・教授）
- ・学長は「教養教育」の改革は最重要課題であると言っただけで、その取組に対する努力が全く不足している。教育に対する、ど素人集団の教務委員会がこれまでこの役を担ってきた大教センターの仕事を全く果たせないでいる。学長が教務委員長となって取り仕切っているのではなく、依然として橋本体制によるトップダウンが行われていることが見て取れた。教務委員会が（勝手に？）モジュール責任者を決め、その責任者が勝手に担当者を決めている。このシステム上の欠陥を正当化するために「教養教育 WG での検討」「各小委員会での検討」をしているとのことであるが、検討に値しない。即ち教務委員会で決められた事項を推し進めるだけの検討委員会になっている。学長は、この欠陥システムをどうにか持ち堪えるためにインセンティブを導入するのであろう。この欠陥システムで来年度から「教養教育」を実施しなければならないが、松田浩先生が林・赤石先生と親密な協力関係が出来上がってきたとの答弁があったが、モジュールの中で、担当者によるこのような信頼関係を気付くことが必要だと考える。ただ、松田先生だからこのような協力関係ができたのだろう。シンポジウム開催前に予め「全学モジュールについて」いくつかの項目について、アンケートを取ったらどうでしょうか。トップからダウンの形式によるシンポジウムから、ダウンからの質問や疑問に答える型式のシンポジウムの開催を望む。（教育学部・教授）
- ・検討すべき点、調整すべき事柄等、24 の全学モジュールの内容がほぼ明らかとなり、来年4月から実施する…という前に、もっと検討しておくべきだったと思う。現時点では、弥縫策を講じるしかないというのが、実に残念。在学生対象での24モジュール受講がどの程度分散するかぜひシミュレーションをしていただきたい。小林先生の講演はとても良かった。昨年学術会議の「分野別質保証」答申を学部執行部で学習したので、その中心となった先生の話は、頷くところが多々あった。本学の「新しい教養教育」とはソゴしているように感じた。（水産・環境科学総合研究科・教授）
- ・小林先生の講演は大変参考になった。しかしながら、モジュールの意味や意義に対する疑問はますます深まった。本日のFDはモジュールへ改革することに対して、否定的な意味があったのか？

○今回のシンポジウムの運営に関して、何か感想やご意見がありましたら、ご記入ください。

- ・「実践に向けて」というシンポジウムなので、実践を中止するという視点の意見にあまり時間を取るべきでないと思う。
(司会に対する要望) (医歯薬学総合研究科・教授)
- ・部局委員を通じての新教養教育の理念は、正しく通知されなかったと感じた。今後一致団結して良いモジュールを使っていくべきと思う。(水産・環境科学総合研究科・准教授)
- ・あまり期待していなかったが、理系出身ということもあり、非常に参考になった。(医歯薬学総合研究科・教授)
- ・モジュールについて、ある程度理解できた。(医歯薬学総合研究科・准教授)
- ・4時間、話を聞き続けると最後には注意力が続かなかった。小林先生に今度は公開授業をしてもらいたい。本当に先生の話は、全て頷けるもので、個人的に思っていたこと等を行ってもらった感じがすっきりした。違う学部の話聞いて面白かった。(大学教育機能開発センター・准教授)
- ・小林先生の話は大変興味深かった。このような教養の考えが長崎大学に生かされてほしい。(教育学部・教授)
- ・もっと前にQ&Aをすべきであったのでは？(医歯薬学総合研究科・教授)
- ・小林先生の基調講演は大いに参考になった。また総合討論での小林先生のお話はよく理解できた。安武先生の話提供もわかりやすかった。(工学研究科・教授)
- ・要点を全学にどのようにフィードバックするか。(水産・環境科学総合研究科・教授)
- ・こういう場にもアクティブラーニングを取り入れるべきではないでしょうか。(水産・環境科学総合研究科・准教授)
- ・個々のご発表は大変勉強になったが、新しい教養教育として現在行われている準備・作業との関係は理解できなかった。
(水産・環境科学総合研究科・教授)

【総括】

第1部では、大学を取り巻く社会情勢、大学における教育の課題、およびこれらの理解に基づく新しい教養教育の考え方について紹介がなされた。教養教育の構築においては広い視野からの一貫した理念が必要であることが述べられたものであり、本学の教養教育に関する議論においても常に立ち還るべき要点が多くあった。第2部は、来年度からの本学の教養教育におけるモジュールやActive Learningなど、構造的、実践的な課題の例示であり、第1部の後続くことで、視野を広くして捉え直すことができ、思考促進効果があった。

第1部と第2部では教養教育に関する視座や議論の奥行きにズレがあり、このことが会場における質疑ならびに事後のフィードバック・シートにおいて指摘された。第1部と第2部の組合せが包括性、相乗効果を生み出したとは言えないようである。今後のFDにおいて、社会情勢を踏まえた教養教育のあり方とモジュールをベースとする本学の教養教育との関係が明確に示され、教養教育を担う教員に理解されることが期待される。

受 講 証 明 書

〇〇〇〇

〇〇 〇〇 殿

下記のとおり第72回長崎大学ファカルティ・ディベロップメント
を受講したことを証明します。

記

日 時 平成23年12月17日（土）

テーマ 教育改革シンポジウム

「新しい教養教育の実施に向けて」

平成 年 月 日

長崎大学大学教育機能開発センター長

橋 本 健 夫

第72回長崎大学FD 教育革新シンポジウム「新しい教養教育の実施に向けて」

日時：平成23年12月17日（土）13:00-17:15

場所：総合教育研究棟 大会議室3階（文教キャンパス）

受講証対象者：97名（参加者：98名）

NO	氏 名	所 属	職 名	備 考
1	池田 光吉	アドミッションセンター	助教	
2	深尾 典男	広報戦略本部	教授	
3	畑山 範	医歯薬学総合研究科（薬）	教授	
4	尾野村 治	医歯薬学総合研究科（薬）	教授	
5	中嶋 幹郎	医歯薬学総合研究科（薬）	教授	一部未受講のため発行対象外
6	中山 守雄	医歯薬学総合研究科（薬）	教授	
7	西田 孝洋	医歯薬学総合研究科（薬）	教授	
8	田中 隆	医歯薬学総合研究科（薬）	准教授	
9	青柳 潔	医歯薬学総合研究科（医）	教授	
10	工藤 崇	医歯薬学総合研究科（医）	教授	
11	篠原 一之	医歯薬学総合研究科（医）	教授	
12	弦本 敏行	医歯薬学総合研究科（医）	教授	
13	中島 正洋	医歯薬学総合研究科（医）	教授	
14	永山 雄二	医歯薬学総合研究科（医）	教授	
15	吉浦 孝一郎	医歯薬学総合研究科（医）	教授	
16	嶋田 敏生	医歯薬学総合研究科（医）	助教	
17	三浦 史郎	医歯薬学総合研究科（医）	助教	
18	Briganti James	医歯薬学総合研究科（医）	助教	
19	小守 壽文	医歯薬学総合研究科（歯）	教授	
20	根本 孝幸	医歯薬学総合研究科（歯）	教授	
21	真鍋 義孝	医歯薬学総合研究科（歯）	教授	
22	渡邊 郁哉	医歯薬学総合研究科（歯）	教授	
23	岡田 幸雄	医歯薬学総合研究科（歯）	准教授	
24	浦田 秀子	医歯薬学総合研究科（保）	教授	
25	平野 裕子	医歯薬学総合研究科（保）	教授	
26	松坂 誠應	医歯薬学総合研究科（保）	教授	
27	宮原 春美	医歯薬学総合研究科（保）	教授	
28	井口 茂	医歯薬学総合研究科（保）	准教授	
29	楠葉 洋子	医歯薬学総合研究科（保）	准教授	
30	趙 成三	病院	講師	

31	林田 秀明	病院	講師	
32	古賀 雅夫	教育学部	教授	
33	藤木 卓	教育学部	教授	
34	中西 弘樹	教育学部	教授	
35	赤崎 眞弓	教育学部	教授	
36	勝俣 隆	教育学部	教授	
37	福田 正弘	教育学部	教授	
38	森下 浩史	教育学部	教授	
39	楠山 研	教育学部	准教授	
40	長島 雅裕	教育学部	准教授	
41	谷口 弘一	教育学部	准教授	
42	赤石 孝次	経済学部	教授	
43	高木 かおる	経済学部	教授	
44	工藤 健	経済学部	准教授	
45	山下 敬彦	工学研究科	教授	
46	林 秀千人	工学研究科	教授	
47	植木 弘信	工学研究科	教授	評価・FD教育改善専門部会委員
48	木村 正成	工学研究科	教授	
49	工藤 愛知	工学研究科	教授	
50	原田 哲夫	工学研究科	教授	
51	辻 峰男	工学研究科	教授	
52	松田 良信	工学研究科	准教授	
53	村上 裕人	工学研究科	准教授	
54	勝田 順一	工学研究科	准教授	
55	末吉 豊	工学研究科	准教授	
56	藤島 友之	工学研究科	准教授	
57	森田 千尋	工学研究科	准教授	
58	安武 敦子	工学研究科	准教授	
59	青木 克己	国際健康開発研究科	特任教授	
60	神谷 保彦	国際健康開発研究科	教授	評価・FD教育改善専門部会委員
61	真木 俊英	産学官連携戦略本部	准教授	
62	久保 隆	産学官連携戦略本部	助教	
63	野崎 剛一	情報メディア基盤センター	教授	
64	上繁 義史	情報メディア基盤センター	准教授	
65	柳生 大輔	情報メディア基盤センター	助教	

66	中西 こずえ	水産・環境科学総合研究科（環）	教授	
67	高尾 雄二	水産・環境科学総合研究科（環）	教授	
68	佐久間 正	水産・環境科学総合研究科（環）	教授	
69	菅原 潤	水産・環境科学総合研究科（環）	教授	
70	中川 啓	水産・環境科学総合研究科（環）	教授	
71	西久保 裕彦	水産・環境科学総合研究科（環）	教授	
72	早瀬 隆司	水産・環境科学総合研究科（環）	教授	
73	姫野 順一	水産・環境科学総合研究科（環）	教授	
74	福島 邦夫	水産・環境科学総合研究科（環）	教授	
75	山下 樹三裕	水産・環境科学総合研究科（環）	教授	
76	朝倉 宏	水産・環境科学総合研究科（環）	准教授	
77	岡田 二郎	水産・環境科学総合研究科（環）	准教授	
78	才津 祐美子	水産・環境科学総合研究科（環）	准教授	
79	杉山 和一	水産・環境科学総合研究科（環）	准教授	
80	西山 雅也	水産・環境科学総合研究科（環）	准教授	
81	山口 健一	水産・環境科学総合研究科（水）	准教授	
82	石橋 郁人	水産・環境科学総合研究科（水）	教授	
83	長富 潔	水産・環境科学総合研究科（水）	教授	
84	亀田 和彦	水産・環境科学総合研究科（水）	教授	
85	阪倉 良孝	水産・環境科学総合研究科（水）	教授	
86	鈴木 利一	水産・環境科学総合研究科（水）	教授	
87	高山 久明	水産・環境科学総合研究科（水）	教授	
88	市川 寿	水産・環境科学総合研究科（水）	准教授	
89	井上 徹志	水産・環境科学総合研究科（水）	准教授	
90	桑野 和可	水産・環境科学総合研究科（水）	准教授	
91	山本 尚俊	水産・環境科学総合研究科（水）	准教授	
92	和田 実	水産・環境科学総合研究科（水）	准教授	
93	梅澤 有	水産・環境科学総合研究科（水）	助教	
94	高橋 正克	大学教育機能開発センター	教授	
95	楊 曉安	大学教育機能開発センター	教授	
96	大橋 絵理	大学教育機能開発センター	准教授	
97	劉 卿美	大学教育機能開発センター	准教授	
98	ウィリアム コリンズ	大学教育機能開発センター	講師	